

近年、農家を脅かす鳥獣被害

収穫を前に農産物が無念の結果に…

そんな経験をしたリング生産者も少なくはないはずだ
 猟友会員の高齢化と後継者不足を背景に

今、私たちに求められていることは一体…

今回は鳥獣被害についての情報を共有し

JAと生産者が一体となって対策の強化を図りたい

近年の鳥獣被害の深刻化

農林水産省によると、野生鳥獣による農作物被害額は平成21年度以降200億円を上回っている状況だ。被害のうち、全体の7割がシカ、イノシシ、サルによるものであり、深刻な問題となっている。

さらに、鳥獣被害は農家の営農意欲減退や耕作放棄地の増加をもたらしつつあるほか、被害額として数字に現れる以上に農山漁村に深刻な影響を与えている。

また、農産物に甚大な被害をもたらしている一方で、被害は農家だけに留まらず、一般市民までも巻き込まれる事態となっている。報道でも大きく取り上げられているように、野生動物が街中を走り回る光景が続出。農産物のみならず、我々人間にも直接被害が生じ

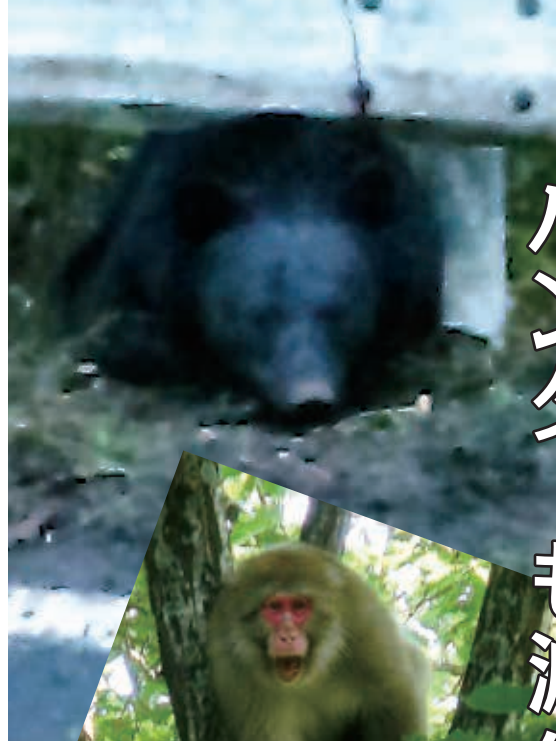
後継者不足 の力が必要だ

2月11日、相馬ハンタークラスの有害鳥獣駆除に同行。そこには、熱き男たちの使命感があった…

雪が降り積もる険しい山道を歩くこと40分、目標地点に到着。勢子と射手に分かれて巻狩り猟が始まった。勢子は立ちはだかる山の急斜面と生い茂る樹々を物ともせず鳥獣を射手の方へと追い込んでいく。山々には勢子の威勢の良い声が響き渡り、銃声が轟いた。

鳥獣被害深刻化

ハンターも減少懸念



高齢化と 今、あなた

せない。しかし、イノシシは過去に東北地方にも広く分布しており、高い狩猟圧があったことで地域的に消滅していた経緯がある。現在の積雪量と狩猟人口の減少に伴い、再び北の大地へ戻ってきたという表現をした方が正しいのかもしれない。

当JA管内の被害状況

相馬地区ではリンゴ園地が山沿いに位置するため、ニホンザルやツキノワグマによる被害が相次いで発生している。

ニホンザルについては、3月頃からリンゴの芽の食害と8月以降のリンゴの食害が目立っている。

一方、ツキノワグマについては5月頃から園地や周辺地域に出没し、リンゴの食害だけにとどまらずリンゴ樹の枝折れ被害が生産者に深刻な影響を与えている。また、昨年は当JAにツキノワグマの目撃情報が相次いで寄せられ、農家からは心配の声が多く上がった。被害及び目撃情報は、我々が把握しているだけでも30件を優に越えている。被害防止に向けて対策強化は急務である。

ていることは背筋が凍りつく思いだ。

鳥獣被害が深刻化している要因として、地球温暖化等による自然環境の変化が大きく影響しているようだ。近年では鳥獣の生息域が拡大し、温暖化に伴って北上している。また、狩猟による捕獲量の低下や耕作放棄地の増加等も考えられ、猟友会の高齢化と後継者不足は重要な課題の一つになっている。

東北エリアに生息する動物

東北エリアにはツキノワグマ・ニホンジカ・イノシシ・ニホンカモシカ・ニホンザル・ハクビシンなど様々な野生動物が生息している。その中でも、気性が荒く人に對しても恐れずに襲いかかるのがイノシシ。体長もクマと同等で凶暴だ。

我々青森県民にとつて、イノシシは身近な存在ではないように思

えるが、それでもない時代が到来していることはご存じだろうか。

当JA管内の鳥獣被害の代表的な存在として挙げられるのはツキノワグマ・ニホンザル・ニホンジカ・ノウサギだが、イノシシの北上上ともない、すぐ側までやって来ているのだ。もつ既に山には身を潜めているとの目撃情報も寄せられているほどだ。イノシシについては稲作などを中心に大きな被害をもたらすことから、心配の声は隠



ひたすら大きな声を出してノウサギを
射手の方へと追い込む勢子たち

相馬ハンタークラブ

巻狩り猟

全神経を集中させ、現れる獲物に照準を合わせる射手



被害防止対策の状況

当JA管内では、猟友会（相馬ハンタークラブ）の銃猟を中心に、箱わな等の設置で有害鳥獣の捕獲に努めているほか、市の補助事業により電気柵の設置で園地への侵入防止の強化を図っている。また、二ホンザルに発信機を取り付けて位置を確認するなど効果的な追い払い活動も実施している。

しかしながら、相馬ハンタークラブの高齢化と後継者不足は深刻

化しているのが現状だ。一人でも多くの方に狩猟免許取得に取り組んで頂きたい。

捕獲状況

昨年6月～11月にかけて相馬ハンタークラブによって捕獲されたツキノワグマは11頭に上り、サルについてはそれを上回る17頭であった。被害件数と把握しているクマやサルの頭数が大幅に増加する一方で、捕獲が追い付いていないのが現状である。

捕獲場所については、相馬字竜ヶ平が中心であるものの、近年では湯口方面でもクマによる被害が発生していることから予断を許さない状況が続いている。当JA管内では、直接人間への被害は未だ確認されていないものの、リンゴ生産者からは農作業の繁忙期に支障を及ぼすなど、不安の声がつのっている。

効果的な対策に向けて

大切な農産物を鳥獣被害から守

り、安心して農作業が行えるようにするためには地域一体となつてこの問題に向き合う必要がある。被害対策と捕獲に携わる人材育成が求められている中で、積極的に講習会の受講や資格取得に取り組んでいただきたい。

では実際に、様々な課題を解決していくには、どのようなことが私たちに出来るのか。そして、どんな助成制度があるのだろうか。



ニホンジカ

やノウサギによるリンゴの芽の食害が目立つ。雪が降り積もるこの時期は、背の低いノウサギもリンゴの芽を食べやすくなるため、ノウサギによる食害が多くなる



食害
害害
枝折れ



近づく恐怖



ツキノワ グマ

の行動が活発になる初夏の交尾期と飽食期は、通常クマが出没しないような地域まで行動域を拡げる傾向があり、近年では目撃情報が増加している。食害のみならず、リンゴ樹の枝折れや樹皮にツメ跡を残すなど深刻な状況だ。

ロケット花火による追払い

講習会受講により市から無償でロケット花火の提供を受けることが出来る



講習会受講でロケット花火を無償で提供

鳥獣などを追払つために一般的に用いられるのがロケット花火。安心安全に農作業を進めていく中で、ロケット花火の活用は非常に重要な役割を果たす。ロケット花火の大きな音で有害鳥獣を園地に近寄らないようにさせるほか、継続的に取り組むことで鳥獣の行動域に変化をもたらしている。

方法を学べる「動物駆逐用煙火消費保安講習会」を開催しており、この講習会を受けた者に限り煙火を無償譲渡していることから、一人でも多くの方にこの制度を活用していただきたい。

電気柵の設置

電気柵は効果的であるが、未設置園地においては依然として被害が発生している



電気柵は園地への侵入防止に効果的

電気柵については、周囲と協力して取り組まなければ自分の畑は守れても、周りが生息地となってしまう。より効果的に侵入防止を図るためには電気柵以外の対策を

併用することが重要だ。また、効果的な柵の設置と冬場の管理を十分に行い、園地周辺に有害鳥獣が寄り付かない環境整備が求められる。正しく使用すれば、電気柵ほど手軽で確実な侵入防止対策はないと言えるよう。

わな猟による捕獲

アライグマについては講習会の受講により、わな猟免許の有無にかかわらず箱わなを使用して捕獲することができる



講習会受講で市から箱わなを借りることができる

わな猟は、「箱わな」や「くくりわな」などを用いて捕獲する方法であるが、被害が発生している

からといって許可なく捕獲することができないため、わな猟免許を取得する必要がある。わな猟については銃猟免許取得に比べて費用が抑えられるほか、農作業と並行して効率的に狩猟ができるなどのメリットが挙げられる。銃猟免許には少し抵抗があるものの、わな猟での捕獲を行なって鳥獣被害防止に努めたいという方には積極的になわな猟免許取得に取り組んでいただきたい。

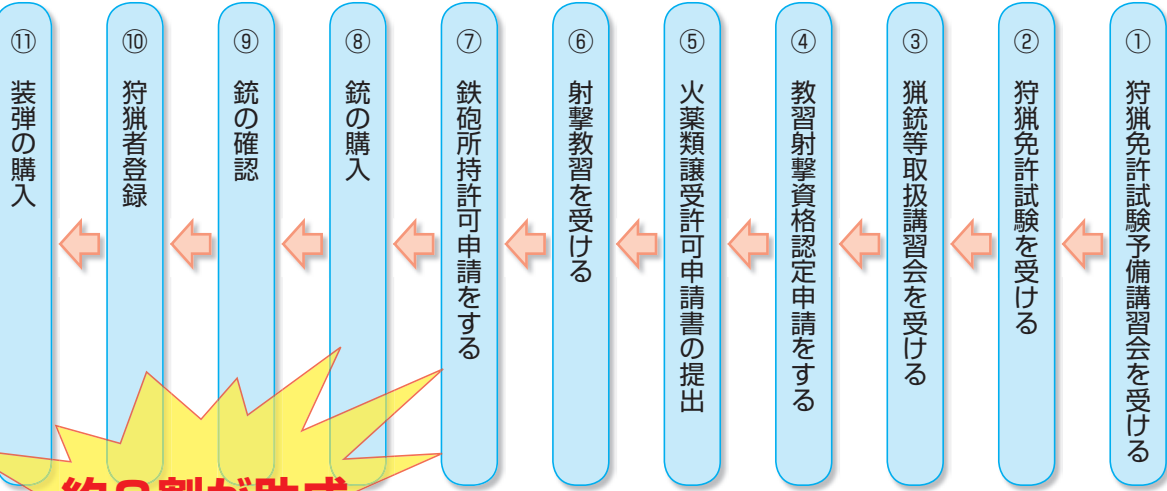
また、弘前市鳥獣害被害防止対策協議会では、外来生物であるアライグマの個体数増加と生息域の拡大に伴い、アライグマ捕獲従事者を養成するため講習会を開催し



弘前市では約2万円で銃猟免許が取得可能に

狩猟免許及び猟銃取得までの流れ

(平成29年度)



約8割が助成

はじめて狩猟免許を取得するときの費用

	銃猟免許	わな猟免許	猟銃・わな猟免許を同時取得
必要経費	94,162	26,762	109,362
助成対象	72,840	15,240	79,840
実質負担金額	21,322	11,522	29,522

ている。この講習会を受講した方については、わな猟免許の有無にかかわらず弘前市から箱わなを借りて捕獲を行なうことができるので、この講習についても積極的に受講していただきたい。

銃猟免許について

弘前市では狩猟免許取得費等の助成金により、少ない費用負担で銃猟免許取得が可能(取得後の助成)

弘前市では、新たに狩猟免許を取得し有害鳥獣捕獲をする意志のある者に対し、狩猟免許取得にかかる費用を助成し、若手狩猟者などの担い手育成を図っている。狩猟免許所持者が減少する一方で、助成の充実により若手の人材育成に期待がかかっている。この機会に狩猟への理解を深め、少しでも多くの方に後継者不足の改善に努めて頂きたい。



増え続ける野生鳥獣を一定の水準に落ち着かせ、農産物の鳥獣被害を減らしていくためには、若い

ハンターの存在が不可欠となった。少しでも多くの人に狩猟という魅力あふれる世界に飛び込んでもらい、ハンターとしての活躍を期待したい。

しかしながら、農業という視点から野生生物に対する敵対心が広がる一方で、自然との共存を図るためには狩猟という捕獲圧を掛けることだけが全てではないことを忘れてはならない。狩猟という捕獲管理が求められている中で、地球環境についても向き合っていく必要があることをもう一度考え直してほしい。現在に至るまで、我々人間が山や森を切り開き、自然環境の変化をもたらしたことで野生生物の住みかを荒らしてきた過去があるからだ。人間により野生生物との境界線がゆがみつつある中で、野生生物と人間がより良い環境を築き上げるためにも豊かな自然を取り戻し、崩れた動物の生態系バランスを見直していくことが大切だ。

農業の明るい未来に向けて、生産量の確保と高品質生産につなげるためにも、今、あなたの力が必要だ。